

## 空手道詳説（47）

### 第2章 沖縄史の概説

#### 4 沖縄史の概略（その7、琉球の言語と文化）

##### （2）空手と沖縄の言語


##### サ 空手と沖縄語

##### 4) 空手で使われていた沖縄の言葉（方言）・・・その2

##### 〔五十音順〕

沖縄方言	漢字なら	説	明
クンディ ー	組手	<p>相対して行う形態の練習法や対戦を、クンディーと称した。</p> <p>「本部朝基と琉球カラテ」（岩井虎伯著）に併記されている本部朝基著の「私の唐手術」（復刻）で、本部はクンディーを「組手」と表記し、その47頁に『琉球の拳法には基本と組手の二つに傾つことが出来る。基本とは唐手の基をさすものにして（中略）、組手は柔道に於けるキメの型にやや似て一駒ずつ連続的になって居り手を組むというという語源から転訛して組手と称するようになったものと思われる。尤も組手は、琉球に於いては、古来より行われたのであるが、未だ制定した型というものがなく、尚文献にも残っていないのである。』とある。続いて『組手に対する参考書と称するものも、その多くは支那（中国のこと）の武人が編成したものを書写して（後略）』と組手と基本を論じている。</p> <p>中国の書というのは、「紀効新書」（戚継光著、1560年初版）や「武備志」（茅元儀編纂、1629年初版）のことであろう。余談だが、剛柔流開祖の宮城長順（1888～1953年）が中国で入手して持ち帰ったとされる「沖縄伝武備志」と、</p>	

	<p>茅元儀の「武備志」は、似通っているようでも同一でないの で注意を要する。</p> <p>また、中国拳法伝来と関わりがあるのでないかと世人の 話題に上る「大島筆記」（1762年、戸部良熙著）には、『先 年組合術（良熙謂う武備誌載する所の拳法ときこゆ）の上手 とて、本唐より公相君（是は称美の号なる由也）弟子を数々 つれ渡り、其わざ、左右の手の内、何分一つは乳の方を押え、 片手にてわざをなし、扱足をよくきかする術也、其瘦せて 弱々したる人でありしが、大力の者、無理に取（り）付きた （る）を、其儘（そのまま）倒したる事など有しなり』とあ って、ここでは「組合術」となっているので、クンディーとは ニュアンスが異なる感を抱く。前々項の（2）冊封使が伝 えたとされる型と沖縄訛り」で述べたように、「クーサンク ー」形、の伝来につながる説もある。文中、扱の字は国字で、 扱が正字。扱足（さすあし）は「突き刺すような蹴り」のこ とをいう。</p> <p>現在に至り、相對することを「組手」（くみて）と称し、 そのまま熟語として踏襲されている。組手には、約束組手、 自由組手、試合組手などに分類されるが、方言で自由組手を 「イリクミー」（「沖縄空手古武道事典」499頁）と呼んで いた。「イリー」は入れることで、喧嘩や口論を「イリワイ」 （又はオーエー）という。</p>
<p>コーサー</p>	<p>方言で「コーサー」は、指を軽く曲げて拳を握り、人差指 と中指の第二関節部分（小拳頭部）でコツンと打つことで、 子供を叱るときなどに用いたから、痛め付けるような打ち方 でなく諫めるときであり、この握った形がコーサーである。</p> <p>空手技のコーサーは、握った拳の人差指の第二関節だけ他 の指より高く突き出して握って親指を添えて押さえ、突き出 した人差指拳を使う。</p> <p>本部朝基（1870～1944年）は52歳の時、京都で外国 人ボクサーとの飛び入り 試合を戦い、一撃でノック アウトしたのが相手のこめ かみ（顛顛、耳と目の間に ある急所で、急所名は「霞」、 英語でテンプル）に放った</p> <div data-bbox="979 1671 1428 2004" data-label="Image"> </div> <p>本部朝基のコーサー</p>

		<p>コーサーであった。本部は、常にコーサーを巻藁で鍛錬していたと伝わる。</p> <p>他に、大塚博紀（和道流）は著書「空手道（第一巻）」の中で、『コーサーには三種の使い方があって、①人差指をわずかに緩めて中指に密着させ、拇指指骨間関節を十分に屈し、拇指爪節の内側にて中指の背面を押し握る。人差指つけ根側面掌指骨関節外側部で打つ。② ①の拇指屈折を少し緩めて中指に密着させ、拇指爪節と人差指で輪の形を作り、その中に相手の下顎の突端を入れても顎骨が拇指関節に当たらないよう囊状にする。相手がのめった時、下から顎を打ち上げる。③人差指をわずかに緩めて中指に密着させ、拇指爪節掌面上部にて人差指の外側面を、当てる箇所を残して握り締める。肋骨部を下より打ち上げ、あるいは顔面、胸部等を捻りながら切り下げのように用いる。』と記しており、これは和道流の用法であって、握り方や技法は流派によって相違する。</p> <p>コーサーとは異なるが類似する使用部位に「中高一本拳」があつて、中指の第二関節部だけ高く突き出す用法である。この「中高一本拳」は、沖縄県の空手形には見当たらないように思うが、筆者の調査不十分ならご教示いただきたい。</p> <p>このコーサー（人差一本拳）と中高一本拳では、技の使い方が異なる。コーサーの技法は、直線的或いは抉るような突き下げ、振り打ちなどである。一方、中高一本拳は拳を回転させない裏突き、突き上げが主となるので、突き出す指一本の差で、技法が相違すること確かめてほしい。</p> <p>右は筆者の大拳頭と小拳頭で、人差指頭と中指頭を合わせて鍛錬の対象にしている。</p> 
サグイディー	探り手	<p>手探りのことは方言で「ティーサグイ」といい、サグイディー（探り手）は相手の構えや動きを手探りの状態から察知し、あるいは窺うような手法で、薄暗がりや暗闇（暗夜）における使い方でもあるが、日中の構え手でもある。それは、修行した人の手先指先には、相手の動きを感知する感覚（セ</p>

		<p>ンサー)が発達するのも確かな事実である。</p> <p>探り手の構えから、容易に相手の腕を絡めて掴めることもできるから、後に出てくる取手(トゥイティー)への変化も容易となり、バッサイダイ最後の手法にもある。</p>
サムレー	士族	<p>王府に仕える士族が「サムレー」で、他に「ユカッチュ」ともいう。それに対し平民は「ハクソー」である。</p> <p>琉球国でいう「サムレー」は、日本の士族と違い武芸を専業としたのではなく、王府に仕える役人で平民の上の中流階級として位置付けられていたので、必ずしも武の専門家とは限らない。それに、琉球国時代には、本土で言うところの士農工商という明確な階級制度は存在しなかった。但し、「サムレー」は武士(ブサー)と呼ばれた人とは意味が違うので、その項を参照されたい。「サムレー」の語源は「侍」であろう。</p>
スイディー	首里手	<p>古来からあったとされている「手」(ティー)の盛んだった地域名からの呼び名で、首里手(スイディー)の他に那覇手(ナァファーディ)と泊手(トゥマイディー)がある。この呼び名による区別は、今でいう流派のような術理上の特徴による区分けではなく、その土地の中で伝統的に行われ伝承されてきた技法に起因する。</p> <p>首里は、1429年第一尚氏王統第二代王の尚巴志(1372～1439年、在位:1422～39年)による三山統一(統一王朝の樹立)から、1879年の廃藩置県までの間、琉球国の首都として政治文化の中心地であって、王府に仕えた士族には文武両道に優れた武人が多かったよいう。</p> <p>首里手は、琉球国が中国と冊封関係下にあったため、官生(かんしょう)という中国北京へ派遣された官費留学生制度と無関係ではない。留学生が学問と武術を併せて学び帰国してたからである。また、冊封使節団の一員として訪れる護衛武官が武術を披露したり、伝授したであろうことも否定できないから、これら二通りの歴史は古く遡るだろう。</p> <p>近世になって語り継がれた人に、真壁朝頭(1769～1824年)、佐久川寛賀(旧姓照屋、1786～1867年、生歿年は諸説あり)、松村宗棍(1809～99年)の名が挙げられる。佐久川は「トーディー(唐手)佐久川」と呼ばれ、それまでの「手」に留学先で学んだ北派少林拳を融合させ、独自の武術を創成</p>

	<p>したと思われる。</p> <p>松村は佐久川に師事し若くして武才を発揮し、役人として薩摩藩に派遣された折に示現流剣法を修得し、更に 1836 年には佐久川と共に北京に渡り拳法を学んだと伝わる。</p> <p>松村に師事した糸洲安恒（1831～1915 年）は、1901 年（明治 34 年）に首里小学校で指導したのを皮切りに、学校教育の場に唐手（カラテ）として導入を図り、ピンアンの形五つとナイハンチ二・三段を創作している。</p> <p>首里手の特徴として、本部朝基は、『古来首里では六分の力でもって習練し、ひたすら敏活を旨とした』と著書に記している。</p> <p>安里安恒（1828～1924 年）と糸洲に学んだ船越義珍（1870～1954 年）は、1922 年（大正 11 年）に本土への公式紹介と普及の嚆矢となっている。</p> <p>関連する流会派は、松濤館流、錬武会流、和道流、糸東流、本部流、小林流、松林流、少林寺流、少林流など。</p>
<p>タッチウグワー</p>	<p>方言で立つことを「タチュン」といい、人が立つことは「チュヌタチュン」である。それに接尾語の「グワー」が付いてこの言葉となり、腰を下ろさず自然体に立った姿勢の技法をいう。</p> <p>この立ち方は本部御殿手（ムトゥブウドウンティー）にある特徴で、膝は曲げず、踵をやや浮かし母指球に重心を掛けて攻防に対処する。腕は構えずに脱力して下し、立位の自然体となる。</p> <p>本部御殿手第 11 代宗家の本部朝勇に学んだ上原清吉（1904～2004 年）は、後に第 12 代宗家を継承するが、100 歳まで長命を保ち、日本古武道協会大会などで 95 歳過ぎまでタッチウグワーの対武器術演武を続けたことで知られた。</p> <div data-bbox="935 1460 1434 1886" data-label="Image"> </div> <p style="text-align: center;">上原清吉</p> <p>上原の年齢を重ねても変わらない演武に感じ入った門弟の池田守利（1941 年～、運動生理学者）は、上原 83 歳の 1988 年（昭和 63 年）第 11 回日本古武道大会（1988 年）から、</p>

		<p>92歳の第22回大会まで9年の間に合計5回、演武中の心拍数推移、歩数と所要時間などの動作分析により、身体的な面と精神的な面を考察した研究など『琉球王家秘伝武術・本のご御殿手の科学研究』（副題：合戦演武から上原清吉宗家の身体的機能と秘儀を探る）の著書がある。年齢相応の低下するはずが、極めて微小の変化にとどまった驚異の報告書きされている。</p>
タンメー		<p>祖父や、おじいさん、老翁の意味で、親しみや尊敬を込め血縁関係以外でも使う。かつて「タンメー」とは、士族の祖父又は老翁のことで、平民の場合は「ウスメー」と使い分けていた。</p> <p>空手界なら、長年修行に励み年老いてなお矍鑠たる人、松村のタンメーとか、糸洲のタンメーなどがそれで、他にも沖縄県にはタンメーを冠して呼ばれたレジェンド空手家は多かった。</p>
チャンナン		<p>幕末の頃（一般的には1853～69年）に、中国山東省出身の漂着人チャンナン（漢字名、禅南の説あり）という人物から中国武術を学んだと「泊手」の伝承にある。</p> <p>また、糸洲安恒は洞窟に住む漂着者の中国人（行商人の説あり）チャンナンから一日だけ形を教わり、その形にチャンナンと名付け、それを基にして後にピンアンの形五つを創作したと伝えられている。</p> <p>12歳（1881年）頃から糸洲に師事した本部朝基によれば、最初の頃はナイハンチとチャンナンを教わったとあるから、この頃既に糸洲が教えるチャンナンの形は存在した。</p> <p>泊手の伝承にある漂着民の禅南と、糸洲が教わり形名の由来となった洞窟住人のチャンナンは、同一人物であったかどうか、今では詳細を詮索しようがない。</p> <p>また、糸洲が教わった形は一つなのか複数の形だったのか、ピンアン創作に際しクーサンクー、バツサイ、チントウからの借用がどのような形で行われたかなど、勝手に憶測を巡らすわけにもいかない。</p>
チュラディー	美しい手	<p>「チュラ」は美しいとか清らかな、盛大な、立派な、という意味である。「チュラトゥジ」は美しい妻で、「トゥジ」は「刀自」（古代の夫人に対する尊称。出典は万葉集）から。「チュラディー」と言えば、長年苦労を重ねて修行し、名人</p>

		<p>芸に達した人の空手は、力まず無駄がなく、しかも内に力を秘めた姿と精神性が現れるから、真の意味で美しさが感じられ、感動に値する。かくも立派な空手家の技能を称える言葉が「チュラディー」なのである。更に上位を示す言葉が本土にあって、それを神技という。</p>
--	--	---

(つづく)

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 藤原稜三著「格闘技の歴史」、1990年3月30日第1版、ベースボールマガジン社発行
- ・ 上地完英監修「詳説沖縄空手道」、1977年11月1日上地流空手道協会発行
- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、(株)勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、(株)河出書房社発行
- ・ 上里隆史著「オモシロ琉球・沖縄史」2011年6月25日初版、(株)角川学芸出版発行
- ・ 外間守善著「沖縄の歴史と文化」1686年4月25日初版、(株)中央公論新社発行
- ・ 比嘉朝進著「歴史・伝説にみる沖縄女性」2005年12月初版、那覇出版社
- ・ 「空手道・保存版」、執筆者・大塚博紀他31名、昭和52年3月初版発行、株式会社創造
- ・ 山里永吉著「首里城内の女たち」昭和47年4月20日初版、閣文社発行
- ・ 沖縄県教育庁文化課編集「中山世鑑」昭和57年10月15日、沖縄県教育庁発行
- ・ 井沢元彦著「日本史集中講座」、平成19年6月20日初版、祥伝社発行
- ・ 金城昭男著「空手伝真録」（上巻）、初版平成11年7月10日、沖縄図書センター発行
- ・ 金城昭男著「空手伝真録」（下巻）、初版平成20年5月1日、(株)チャンプ発行
- ・ 埴原和郎著「日本人の骨とルーツ」、初版平成9年9月30日、角川書店発行
- ・ 諸橋轍次著「大漢和辞典（辞典）」、初版昭和32年8月25日、大修館書店発行
- ・ 大塚忠彦翻訳、楊明時監修「沖縄伝武備志」、初版1986年4月、ベースボール・マガジン社発行
- ・ 島村幸一（立正大学教授）の論文、『土佐漂着の「琉球人」』
- ・ 沖縄県教育庁文化課編集「空手道・古武道基本調査報告書Ⅰ」、平成6年3月30日第一刷、榕樹社発行
- ・ 沖縄県教育庁文化課編集「空手道・古武道基本調査報告書Ⅱ」、平成7年3月第一刷、緑林堂書店発行

- ・ 内間直仁・野原三義編著「沖縄語辞典」(副題：那覇方言を中心に)、初版 2006 年 5 月、(株) 研究社発行
- ・ 大塚博紀著「空手道」第一巻(非売品)、昭和 45 年 8 月 25 日初版、大塚博紀記念道場維持会発行
- ・ 長嶺将真著「沖縄の空手道」、昭和 50 年 2 月 10 日初版、(株) 新人物往来社発行
- ・ 長嶺将真著「沖縄の空手・角力名人伝」、昭和 61 年 6 月 10 日、(株) 新報出版発行
- ・ 佐久田繁著「空手名人列伝」、1987 年 11 月 1 日、月刊沖縄社発行
- ・ 岩井虎伯著「本部朝基と琉球カラテ」、平成 12 年 3 月 25 日、(株) 愛隆堂発行
- ・ 金野敏著「義珍の拳」、2009 年 5 月 25 日第 1 刷、(株) 集英社発行
- ・ 金野敏著「武士猿」、2012 年 5 月 25 日第 1 刷、(株) 集英社発行
- ・ 今野敏著「チャンウミーグワー」、2017 年 12 月第 1 刷、(株) 集英社発行
- ・ 陳舜臣著「琉球の風」上巻、2016 年 3 月 15 日、(株) 講談社発行
- ・ 陳舜臣著「琉球の風」下巻、2016 年 3 月 15 日、(株) 講談社発行
- ・ 名越左源太著、國分直一・恵良宏校注「南島雑話 1」(副題：幕末奄美民族誌)、2007 年 9 月 25 日、(株) 平凡社発行
- ・ 名越左源太著、國分直一・恵良宏校注「南島雑話 1」(副題：幕末奄美民族誌)、1984 年 3 月第一刷、(株) 平凡社発行
- ・ 名越左源太著、國分直一・恵良宏校注「南島雑話 2」(副題：幕末奄美民族誌)、1984 年 4 月 13 日第一刷、(株) 平凡社発行
- ・ 金城 裕著「唐手から空手へ」、初版平成 23 年 11 月 30 日、財団法人日本武道館発行
- ・ 池田守利著「琉球王国秘伝武術・本部御殿手の科学的研究」(副題：合戦演武から上原清吉宗家の身体的機能と秘儀を探る)、初版平成 12 年 11 月 23 日、壮神社発行
- ・ 高宮城繁、新里勝彦、仲本政博編著「沖縄空手古武道事典」、2008 年 8 月 1 日初版、柏書房(株) 発行